

五 つ 子 に 関 す る 研 究

心 理 班 報 告

研 究 協 力 者

東京都立大学名誉教授 山 下 俊 郎

協 同 研 究 者

鹿児島大学教授 島 田 俊 秀

東京家政大学講師 大 滝 ミドリ

東京家政大学講師 川 合 貞 子

東京家政大学助手 高 橋 裕 子

山下五つ子の精神発達についての第3年次報告として、1978年1月31日すなわち生後2年以降、1979年1月31日すなわち生後3年にいたる1年間の発達状況の検査結果の概略を報告する。

研究の方法としては3種類の発達テストと行動観察を用いた。その1は本研究の最初から用いている津守式乳幼児発達質問紙を用い、その記入は毎月ベビシッターの平島綾子、後に板井ケイ子と母親が行った。その2はこれも最初のテスト以来用いているMCCベビテストである。このテストは発達の最上限適用範囲が3歳までなので、2歳半以後は山下俊郎の編んだ

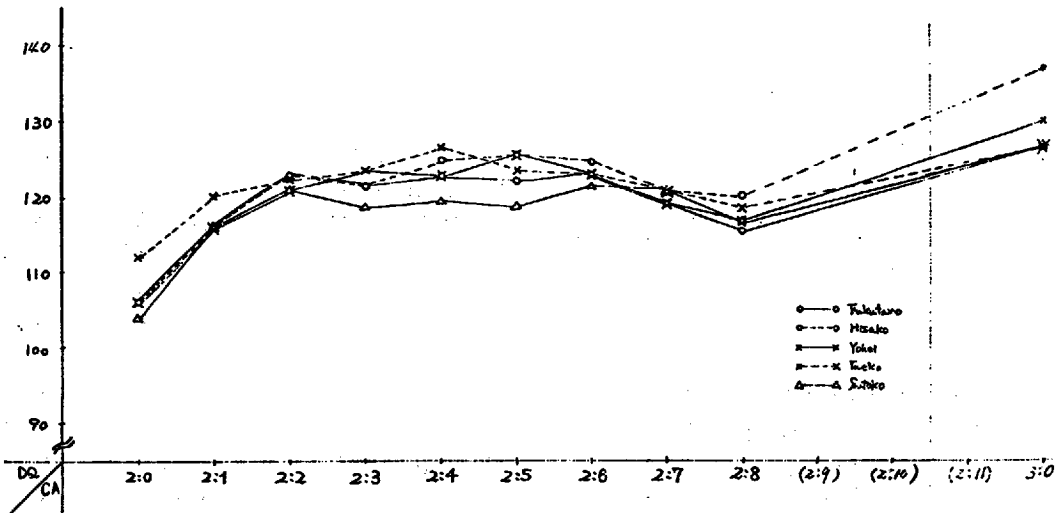
山下幼児発達検査（適用範囲2歳-7歳）を用いた。テスターは山下の監督のもとに、大滝ミドリ、川合貞子、高橋裕子が努めた。テスターは必然的にテスト中を中心とした行動観察の記録を行った。MCCベビテストおよび山下幼児発達検査の実施は、原則として2月毎に行ったが、対象幼児の身体的状況によってはこれが不可能の場合があって、時期が多少ずれている場合、時によっては不可能の場合も1回あった。

まず津守式乳幼児発達質問紙による2歳から3歳に至る間の毎月のD.Q.の推移を数字で見ると表1の通りであり、これを図示すると図1の通りである。

表1 乳幼児精神発達DQの全体的推移（津守質問紙法）

Date CA	S53									S54
	2/27	3/27	4/24	5/29	6/28	7/24	8/29	9/29	10/29	2/14
	2:0	2:1	2:2	2:3	2:4	2:5	2:6	2:7	2:8	2:9
FUKUTARO	106	116	123	121.4	122.8	122.0	123	119	115.4	126.6
HISAKO	106	116	123	121.4	124.6	125.4	124.6	120.6	120	137
YOHEI	106	116	120.7	123.5	122.8	125.4	123	119	116.9	130
TAEKO	112	120	122.6	123.5	126.3	123.7	123	120.6	118.5	126.6
SATOKO	104	116	120.7	118.9	119.3	118.6	121.3	120.6	116.9	126.6

図1 乳幼児精神発達DQの全体的推移 (津守質問紙法)



表および図に示される通り2歳から2歳2月に至るまで上昇し、以後2歳8月に至るまでほぼ安定し、5児ともDQ120のあたりに落ちついている。この表と図には、2歳9、10、11月の資料を欠いているが、これは住居の移転、ベビーシッターの移動等のため資料不十分の故に削除したのである。そして3歳に至るとDQはさらに上昇し、126-137という優秀な発達を示している。この場合には質問紙記入者の主観的要因が混入するので、その影響の為評価が多少甘くなっていることも考慮されなければならぬ。しかし、2の

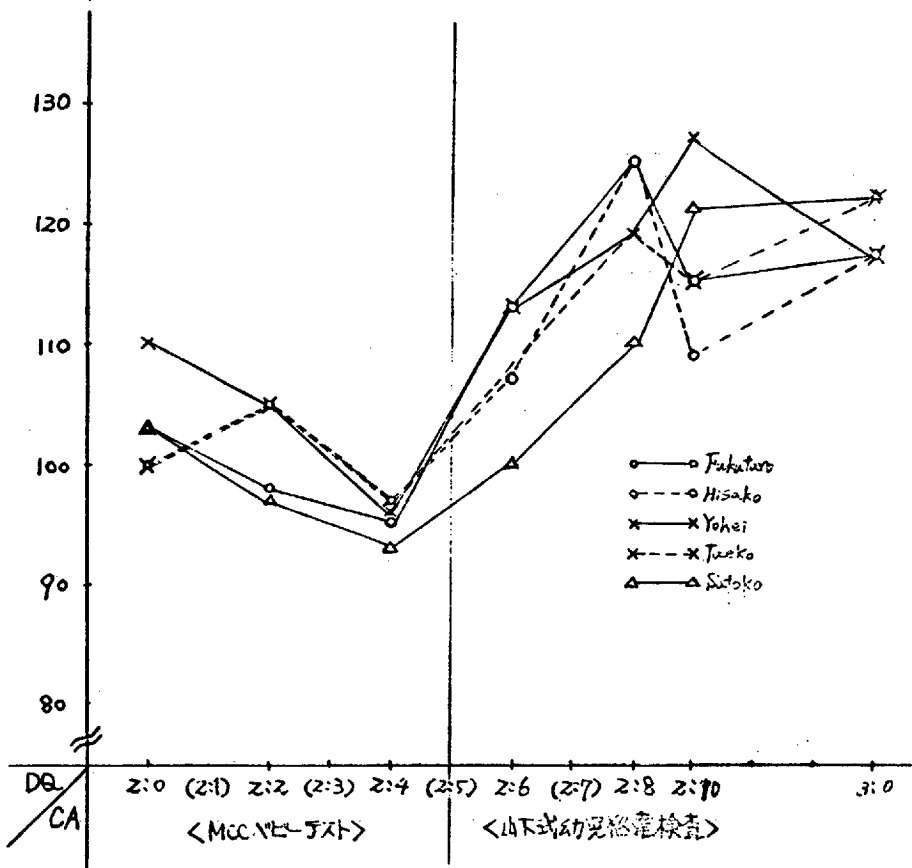
DQの上昇については、前年の報告に述べたように5児とも言語とくに自然語に遅滞の傾向が続いていたものが、2歳半以後急速な言語発達が見られるという要因が強く影響しているものと考えられる。

次に、テスターが直接5児に発達テストを施行した結果について述べると、前述の理由により2歳から2歳4月まではMCCベビーテスト、2歳6月以後は山下幼児発達検査を用いている。テストによる2月毎のDQを示したものが表2および図2である。

表2 MCCベビーテスト・山下式幼児発達検査結果による一年間の推移

Date CA	(MCC ベビーテスト)			(山下式 幼児発達検査)			S54 2/20
	S53 2/2	3/30	6/6	8/9	10/5	11/28	
2:0		2:2	2:4	2:6	2:8	2:10	3:0
FUKUTARO	103	98	95	113	125	115	117
HISAKO	100	105	97	107	125	109	117
YOHEI	110	105	96	113	119	127	117
TAEKO	100	105	97		119	115	117
SATOKO	103	97	93	100	100	121	122

図2 MCCベビーテスト・山下式幼児発達検査結果による一年間の推移



この両テストによる結果についても、前の津守式質問紙を用いた結果と全く同じことが言える。すなわち2歳半以前においてはやや足踏みないし遅滞気味であったのが、2歳半すぎるとDQの上昇が見られる。これは津守式質問紙による結果について述べたのと同じ要因すなわち言語の発達が著しくなったことが影響していると考えられる。3歳におけるテストによるDQは、3児が117、2児が122と優秀な発達を示している。

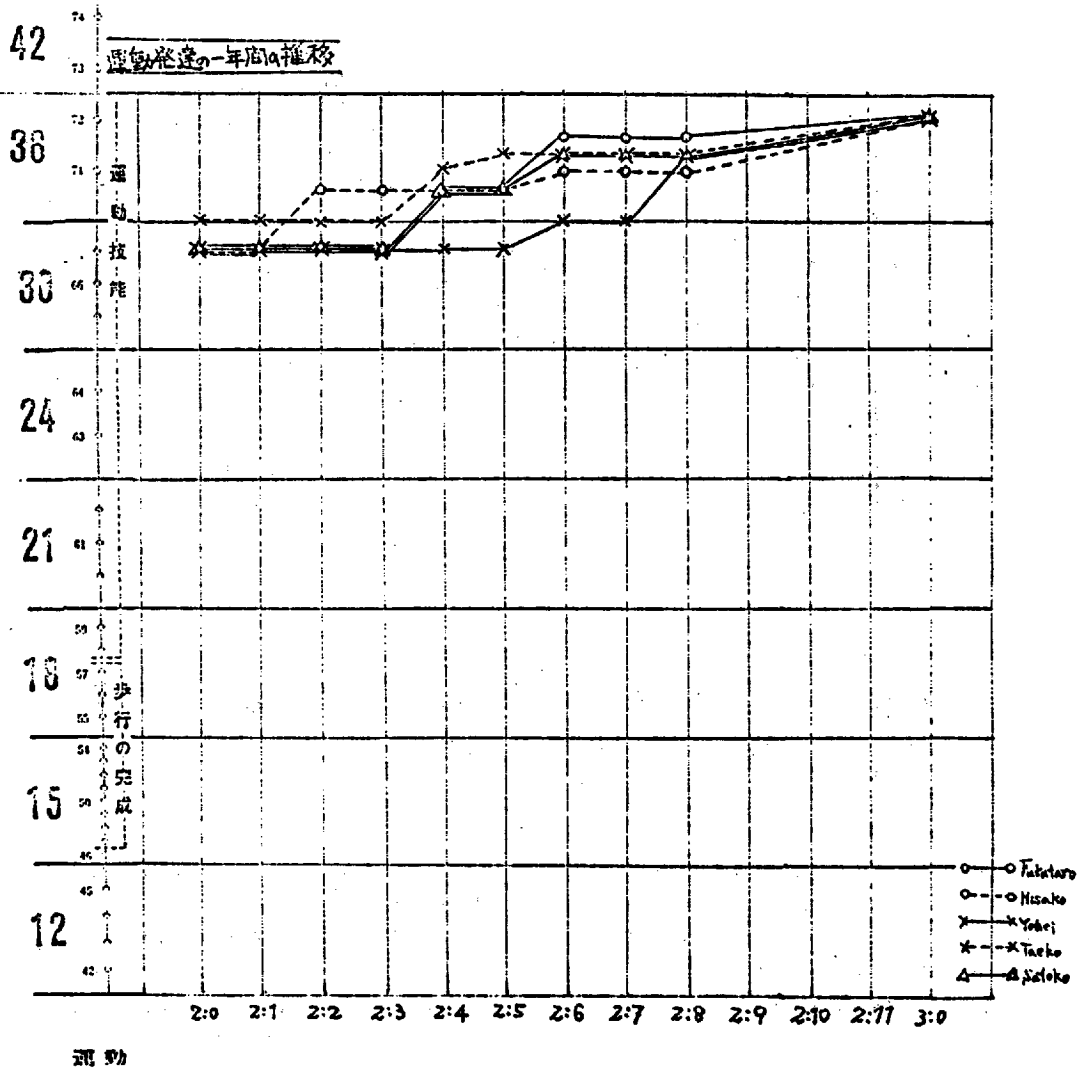
以上述べた所によって、五つ子の全体的発達の状況を見ると、2歳すぎ、とくに2歳半以後の発達に著しいものがある。その最大の要因は言語の発達であることは既に述べた通りであるが、5児の生活環境が住居の移転によって、1978年10月半以後すなわち2歳9月以後、十分に活動できる空間が与えられたことによ

ってすべての面の発達が促進されたと考えられる。情緒、社会性の面においても成長の著しいものがあり、これらの点は日常の行動観察の結果によっても裏づけられている。

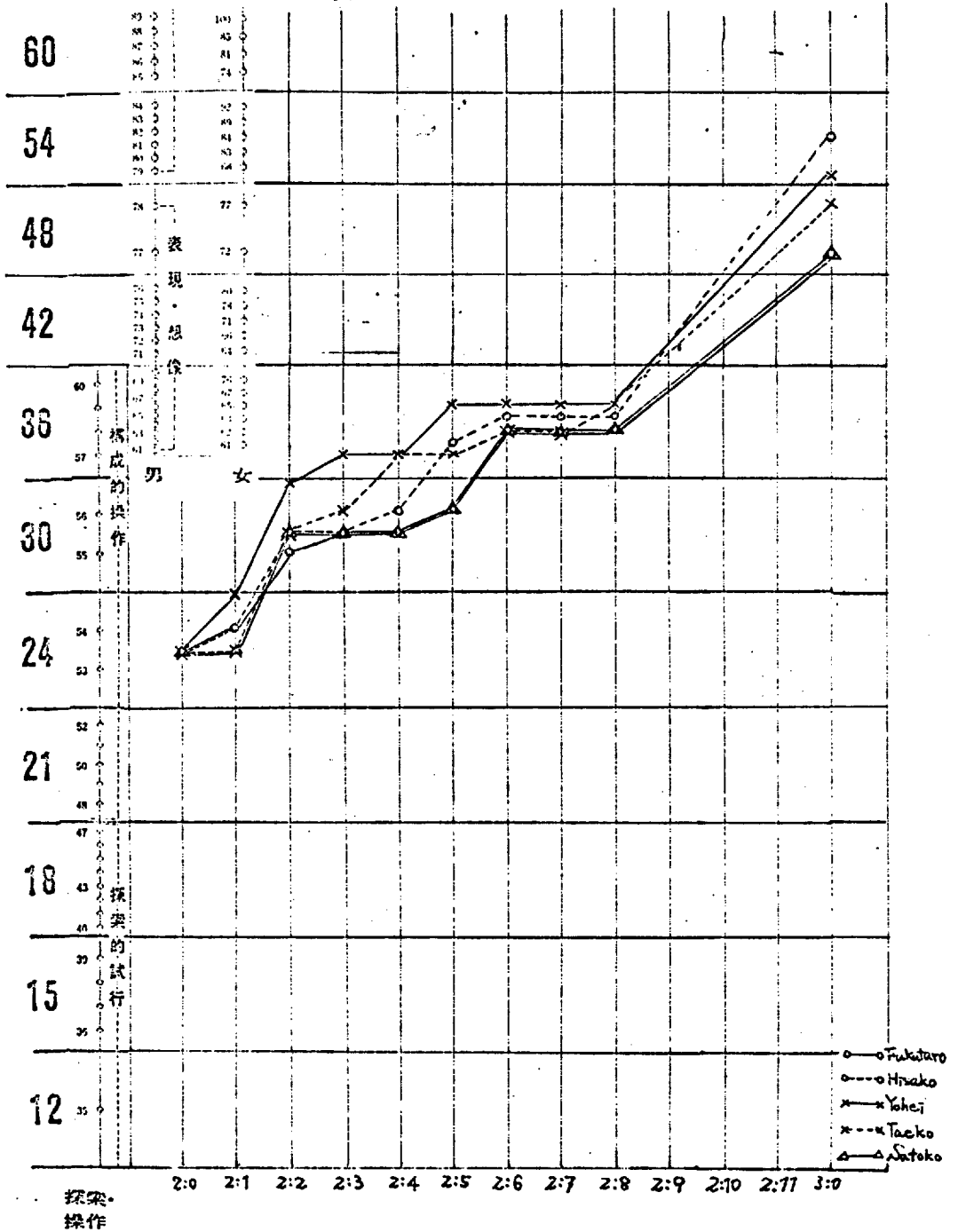
このような状況にある5児は、1979年4月から幼稚園に入園するが、自然の発達においても一段階を画する3歳をすぎて、新しい生活面の発達に大きく期待されるものがある。

（なお、参考の為、津守式質問紙における行動の部面別の発達状況を示す図を附録として付け加えておく。）

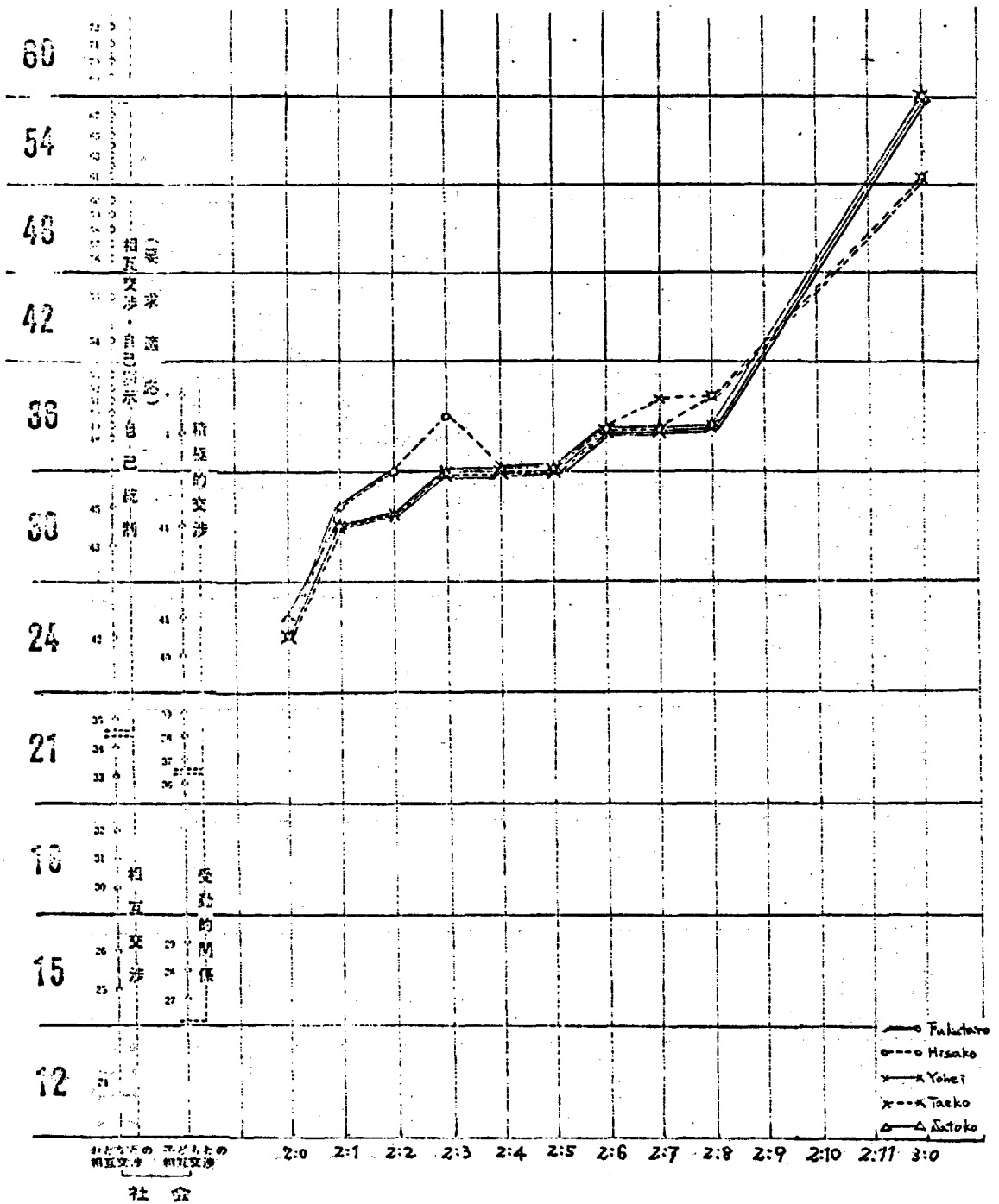
運動発達の1年間の推移



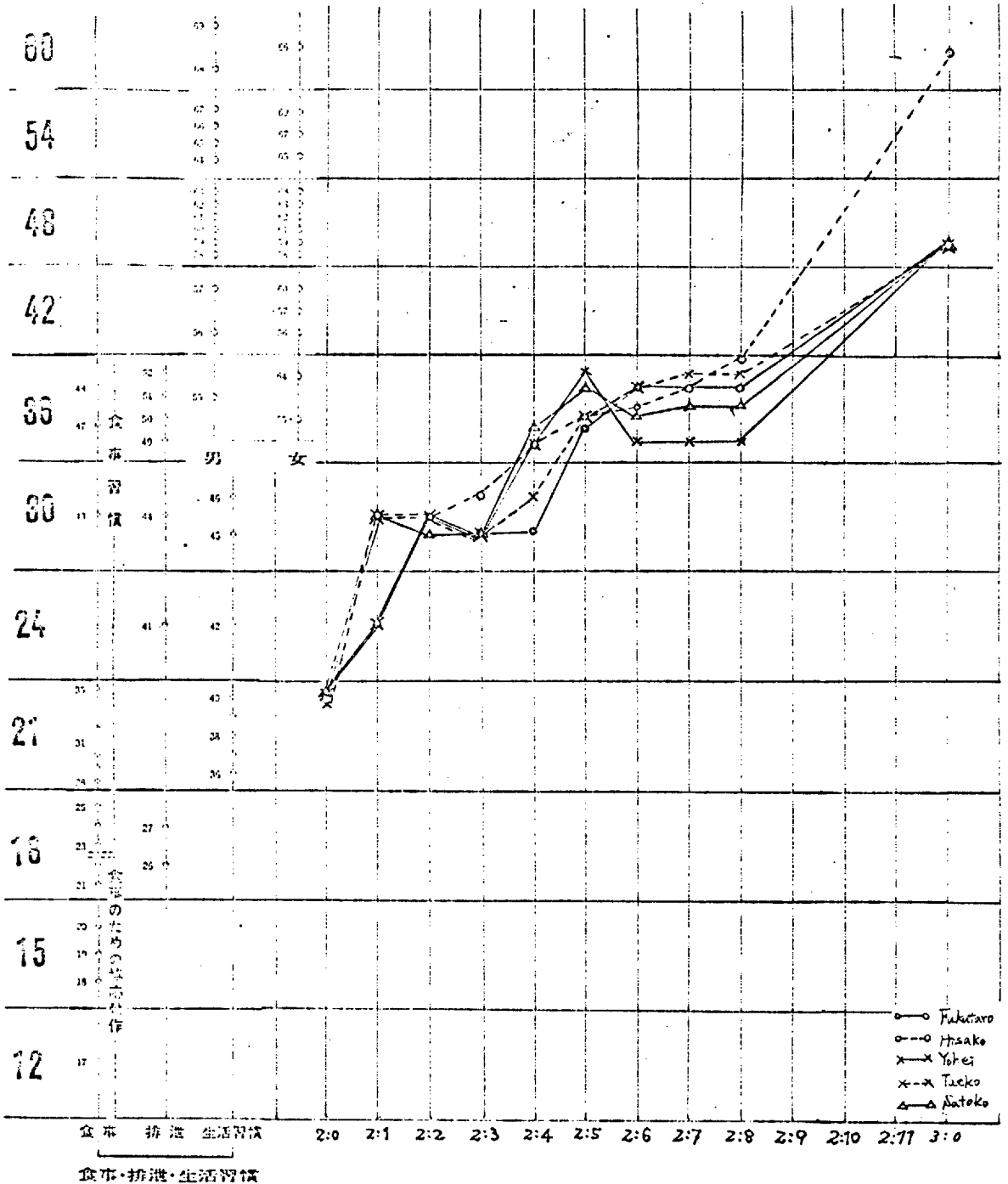
探索、操作行動発達の一年間の推移



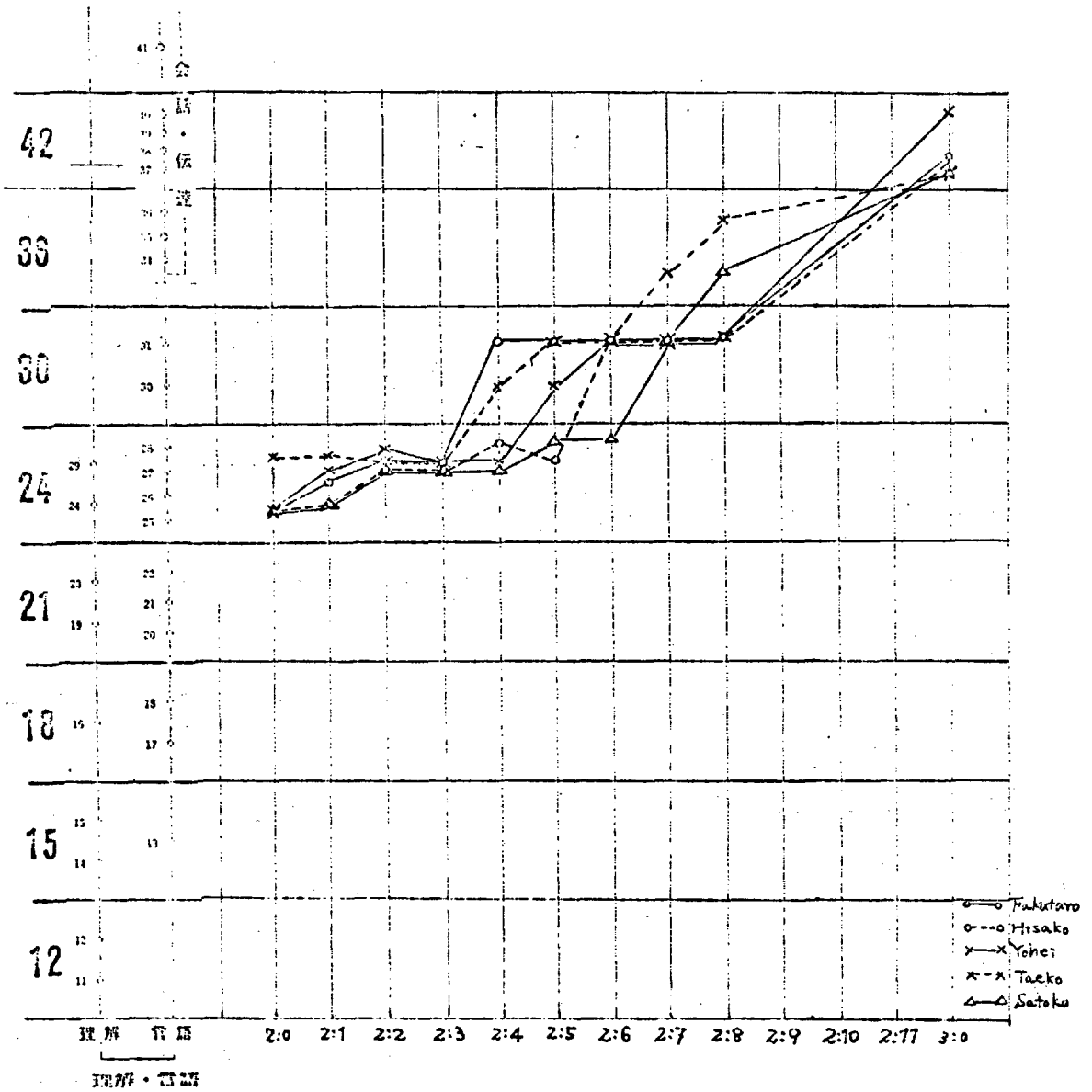
社会的行動発達の一年度の推移



食事・排泄・生活習慣行動発達の一年間の推移



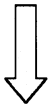
理解・言語発達の一年間の推移



日	月	年	日	月	年
1	4	2	1	3	2
2	4	2	2	3	2
3	4	2	3	3	2
4	4	2	4	3	2
5	4	2	5	3	2
6	4	2	6	3	2
7	4	2	7	3	2
8	4	2	8	3	2
9	4	2	9	3	2
10	4	2	10	3	2
11	4	2	11	3	2
12	4	2	12	3	2
13	4	2	13	3	2
14	4	2	14	3	2
15	4	2	15	3	2
16	4	2	16	3	2
17	4	2	17	3	2
18	4	2	18	3	2
19	4	2	19	3	2
20	4	2	20	3	2
21	4	2	21	3	2
22	4	2	22	3	2
23	4	2	23	3	2
24	4	2	24	3	2
25	4	2	25	3	2
26	4	2	26	3	2
27	4	2	27	3	2
28	4	2	28	3	2
29	4	2	29	3	2
30	4	2	30	3	2
31	4	2	31	3	2

9月							
2年							
		折居んちりしYの環境 れんたんを伝ふまにん入 るやうに					
		・レールと土境のガイネス ・エスチエライサエミヤイの とびろく(土をふるす) ・フウ巻のあつじん ・エスチエライサエミヤイ ・長(年)と脈(り)通(ら)ず					
		下電野の母マナをしてハイハイ アヤシクカイニスレもろ 目と茶と夜を黒と アツマシ。					
		・重井ふくじん監人んまて本本 アも毎(今んかきう)					
		下アツクワクワターニ トウアモオオチイヨ ナカナカアチナイネ Yメック(名物)とあかて行きて 茶(茶)とアツ(ア)とない					
		下アツクワクワターニ トウアモオオチイヨ ナカナカアチナイネ Yメック(名物)とあかて行きて 茶(茶)とアツ(ア)とない Fアチチ人(大ぬ)人(野も)の夜 ほ(の)夜も地(境)ん(海)マ					

①
11/2
記入



検索用テキスト OCR(光学的文字認識)ソフト使用

論文の一部ですが、認識率の関係で誤字が含まれる場合があります



山下五つ子の精神発達についての第3年次報告として、1978年1月31日すなわち生後2年以降、1979年1月31日すなわち生後3年にいたる1年間の発達状況の検査結果の概略を報告する。